2024 優駿エッセイ賞
次席（GⅡ）
受賞作

諦めなければきっと

菅野（すがの） 朝子（あさこ）

受賞のことば

長年にわたった熊沢重文騎手への応援。集大成として、素直な想いをつづりました。私のエッセイを「作品」と言って下さったことにまず驚き、先生方のお目にとまりましたことは一生の宝です。実は間近に税理士試験の結果発表をひかえており、緊張しています。しかしどのような結果でも受けいれ、今後も諦めない人生を歩んでいくつもりです。

栄えある賞をいただき競馬に携わる全ての方に感謝いたします。

プロフィール

証券会社勤務。平成元年当時、競馬や麻雀、ゴルフをやる私達は「おやじギャル」でした。1型糖尿病の発症を機に、一生働ける税理士を目指しています。元来活発な性格と、夫の支えで日々楽しく過ごしております。

第七十三回税理士試験結果通知書。
震える手で封をあけた。
国税庁の朱印が押されていない紙は
『不合格』をあらわしていた。
長年にわたる受験勉強。諦めてしまえば楽になる。でもわたしは結局、また机に向かう。
あの日、熊沢騎手の騎乗を見て、諦めない人生を選んだから。

二十年ほど前、会社の仲間達と行った東京競馬場。
あるレースを見ていてわたしは、しんがりを走っている馬に目がとまった。
騎手が一生懸命気合をつけ、最後の直線まで一頭でも抜こうとしていた。
（あの騎手は誰だろう）
競馬新聞の騎手欄を見ると『熊沢』と書いてあった。
次に競馬場に行ったときも仲間に言わず黙って熊沢騎手の騎乗を見ていた。
その日も勝たなかった。
でもやっぱり最後まで手を緩めなかった。
気迫あふれる姿が、家に帰っても頭から離れなかった。
三度目はわたし一人で熊沢騎手を見に行った。そこでも勝たなかった。
諦めない人。

わたしは魅せられてしまった。
彼の騎乗姿勢は、その後のわたしの生き方に大きく影響した。

わたしは税理士になりたいという夢があり、働きながら受験勉強をしている。何年も不合格が続いて苦しい。
もうやめようと思う度に熊沢騎手の騎乗の様子が目に浮かんだ。
（やっぱり諦めたくない）
なにか形にしてみようと、熊沢騎手の応援幕をつくることを思い立った。
どんな色にしようか。目立つ色がいい。
『魅せる巧者　熊沢重文』
出来上がってきた赤い色の応援幕。
はじめて応援幕をはる日は、早朝から中山競馬場の正門前に並んだ。
受付で応援幕に掲示許可シールを貼ってもらい、パドックへ急いだ。
応援幕をとめるとき、隣の人のやり方を見たが、慣れない焦りで紐がうまく結べなかった。職員の方が近づいてきて、
「ほら、早くしないと馬が出てくるよ」と手際よく手伝ってくれた。
パドックの反対側にまわって確かめてみた。

色とりどりの応援幕の中に、わたしの赤い応援幕が誇らしげに並んでいた。
（熊沢騎手はこの応援幕に気付くかな）
わたしは緊張しながら応援幕の位置に立っていた。
そのうちそのレースに出走する馬達が厩務員にひかれて出てきた。
「トマーレー」の合図で馬達が脚を止め、騎手達が出てきた。
横一列に並んで一礼をした。
わたしは目で素早く熊沢騎手の姿を追った。
応援幕に全く気付かず、わたしの目の前を通り過ぎた。
（やっぱり気付かないものなのか）
と、そのとき、向こう側にまわった熊沢騎手がチラッと、わたしの応援幕を見たようだった。
わたしはもう充分満足だった。
パドックでは色々な性格の馬がいて面白い。キョロキョロと落ち着きなく見回す馬、人混みが怖いのか大きな声でないてしまう馬。
騎手達はそれぞれ、馬の首筋を軽くたたいたり、口笛を吹いたりして上手になだめていた。
今日この舞台に立つまでにたくさんの人たちの苦労があったことを知った。

わたしは、休日に勉強の合間をぬって応援幕をはりに

行くようになった。
熊沢騎手はどんなときでも騎乗できる喜びを全身いっぱいにあらわしていた。
そしていつも、馬のお尻にチョンと塩を乗せていた。
熊沢騎手は障害レースに乗ることが多い。無事にまわってこられますようにとの願いであろう。
わたしはいつも見ているうち、お尻の塩を乗せたままゴールしてくる馬がいることに気付いた。
いくつも障害を飛び、激しいレース展開の中、よほど飛越のバランスが良いのだろう。
案の定、そういう馬は重賞レースに出るほどまでに勝ち上がっていった。
未勝利戦のうちからそういう馬がわかるのは、わたしだけの楽しみだった。
二〇一二年十二月二十二日。中山大障害。
熊沢騎手はわたしの目の前で障害GⅠレースを勝った。このとき熊沢騎手は、平地、障害両方のGⅠを勝った騎手となった。
表彰式で熊沢騎手は泣いていた。
わたしは関東地方の競馬場はもちろん、時には夜行バスに乗って関西方面の競馬場にも行った。
見知らぬ方から、
「関東でいつも応援幕をはってる方じゃないですか?」や、
「先日は熊沢騎手の千勝おめでとうございます」と声をかけていただいたりして、その場での交流も楽しかった。
同じ熊沢騎手の応援幕を掲げている方とも友達になった。
こうして月日は流れた。

『熊沢騎手、現役を引退』
ショックだった。首の怪我が長引いているようだ。命が続く限り騎手でいると思っていた。でももう怪我をしなくなると、安堵感も正直あった。いろんな思いが押し寄せてきて、せつなかった。
引退式当日。わたしは京都競馬場へ向かった。
現地では何千人もの熊沢ファンがつめかけていた。
「熊ちゃんお疲れ様ー」
「熊ちゃんありがとー」
熊沢騎手は人気薄の馬で勝つことがよくある。わたしよりずっと古くからの熊沢ファンも多い。
熊沢騎手は終始、空を見上げるようにしていた。笑って終わろうと決めていたのだろう。
たくさんの声援に送られて熊沢騎手は去っていった。
お守りみたいだった、わたしの赤い応援幕。目の前で何度も勝ってくれた。この応援幕がある日は、一度も落馬をしなかった。
引退後。わたしはこの応援幕をご本人に差し上げたいという思いになった。
つてを頼って希望を伝えると、受け取ってくださるとの返答があり、直接お渡しできることになった。
その日はご夫妻で出迎えてくださった。
熊沢元騎手は少し太ったようだった。
「僕の応援幕をはってくれていたことは、最初のときから気付いていたし、いつも心強く思っていました。今日は赤い応援幕が来ていると思うと力がわいた。長い間本当にありがとう」
わたしは、年月を経てボロボロになった応援幕を、お渡しした。
応援幕の裏にはびっしりと掲示許可シールがはってあり、六十枚以上にはなるだろう。それを見た熊沢元騎手は一瞬、息をのんだようだった。
ご夫人からもお話を伺うことができた。
熊沢騎手は、ときには大怪我をして帰ってきたが、一度も弱音をはかなかったこと。傷を冷やす氷が足りず、ご夫人が深夜のコンビニを何軒もまわったこと。真冬の布団の中、氷をつけたまま寝ている熊沢騎手の姿を見て、かわってやれない苦しみを知ったこと。
ウイナーズサークルで脚光を浴びる熊沢騎手の陰にはいつもご夫人の支えがあったことを思った。
わたしは失礼ながら、気になっていた質問をぶつけてみた。
「ほぼ勝負がついているレースでも、最後まで諦めずに追うのはなぜでしょうか」
「成績の良い馬、悪い馬。どんな馬にも将来があり、可能性を秘めています。実戦でしかわからないことを伝えてきたつもりです」
「馬の将来を」
「はい。でも僕は馬に嫌われてるんです」
「なぜわかるのですか」
「僕が近づいていくと馬が脚を止めてしまうんです。馬はとても賢い生き物です。人間ほどは色や形がはっきり見えていません。ただ視野は広く、また匂いで人を見分けます」
「てっきり好かれているのかと」
「いいんです。騎手は馬に嫌われるぐらいじゃないと。馬から見て、この人には走らされてしまうと、わかるからなんです」
最初、寡黙な印象の熊沢元騎手だったが、馬の話になると目を細め、嬉しそうに話してくれた。
「充分やったと。悔いは残るかもしれないけど、それはそれで受け入れようと思っています」
まずは首を治し、やはりこの先も馬にかかわっていく仕事をと、考えておられるようだった。
彼はもう前を向いて歩いていた。引退してもなお何ひとつ諦めていなかった。
わたしもまた税理士試験に挑戦する。
泣きながら机に向かったことも無駄でなかったと思える日がきっとくる。
夢をつかみ取るまで絶対に諦めない。